

# 古期フランス語の副詞 *mout* の盛衰

——*beaucoup* および *très* との交替を巡って——

森 本 英 夫

0. フランス語の歴史において、古期フランス語から中期フランス語を経てルネサンス期のフランス語に至る過程は、あらゆる意味で大きな変動期であったと言える。俗ラテン語から継承されてきた名詞および形容詞にみられる2格体系が崩れ、形態素-sは単数主格の意義を失い、専ら複数の意義を残すのみになる。語末子音の黙音化は、動詞の人称活用体系にも影響を与え、これまで動詞の活用語尾に託されていた人称意義を希薄にし、代名詞主語の出現を要請するようになる。それと同時にこれまで比較的に自由であった語順も *s+v+c* という形で安定化に向かう。

新たな部分冠詞の誕生も含めた冠詞の発達、動詞複合時称の安定、新しい機能語の誕生など、決して短い期間でないとはいえ、フランス語は大きな変貌を成し遂げた。統辞上の問題だけではない。新しい社会や文化に則した語彙が生み出され、導入され、次第次第にフランス語を豊かなものにしていった。

このような動きの中で、当然失われていくものも少なくなかった。語の誕生にもそれなりの理由があるように、語の消失にもそれなりの理由がある筈である。多くの場合、同じ機能や意味をもった語との競合が起こり、一方が生き残り、他方が消滅するという経緯を辿る。その際、使用頻度が高いということが生き残りの条件になるとは必ずしも言えないようである。古期フランス語できわめて優勢を誇っていた *cuidier* (<*cogitare*) が *penser* (<*pen-sare*) にその席を明け渡し、副詞的接統詞として頻繁に出現していた *si* (<*sic*) は *et* の陰に隠れ、万能を誇った前置詞 *en* は、新たな *dans* の出

現にその生産性を奪われてしまった。古期フランス語で、頻度からも、機能においても他の追隨を許さなかった語が、衰れにも近代フランス語の仲間入りをすることが出来なかった副詞 *mout* (*molt*, *moult*, *mon*, etc. < *multum*) も、この範疇に加えられよう。この *mout* の姉妹たちが、いまなおスペイン語では *mucho*, イタリア語では *molto*, ポルトガル語では  *muito* として活躍しているだけに、フランス語で消滅する運命を辿ったことが謎として残るのである。

17世紀のモラリスト La Bruyère によってその廃用を惜しまれている<sup>1)</sup>この *mout* について *Dictionnaire étymologique et historique du français* は、16世紀に *beaucoup* によって排除されたと短く記述しているだけである<sup>2)</sup>。文法学者 Henri Estienne [1531–1598] がこの *mout* の使用を「古い」と糾弾しているにしろ<sup>3)</sup>, 16世紀ではまだ余命を保っていたようである。1530年にロンドンで出版されたイギリスの人文学者 Palsgrave [1480–1554] の英仏対照文法書 *Lesclaircissement de la langue françoise* を見ると、副詞を修飾する *moult* はいまだ健在であることが分かる。例えば *very* を伴う表現においては、*Very gladly: Moult volentiers*, *Very strongly: Moult formen* のように *moult* が示されているし、*Moche* (= *much*) に関しては *beaucoup* と *moult* が併記されている。そして *très* は *full* と結びつく (*full well* = *tres biē*, *fullwisely* = *tres saigement*)<sup>4)</sup>。Huguet の16世紀の語彙集 *Dictionnaire de la langue française au seizième siècle* の *moult* の項には、古期フランス語の辞書に劣らず詳しくその用法が示されている。また Gougenheim は16世紀を扱った文法書の中で、近代フランス語との主要な差異は、形容詞を修飾する際に *moult* を用いるか *beaucoup* を用いるかであるとしている<sup>5)</sup>。16世紀になって頻繁に用いられるようになったこの *beau* と *coup* の合成語である *beaucoup* は決して16世紀の産物ではなく、すでに13世紀に Joinville の *La Vie de Saint Louis* の中で用いられている (Dubois)。

しかし *mout* の競争相手は *beaucoup* だけではなかった。形容詞を修飾する機能から言えば *très* が最強の敵であったし、他の機能では *tout* や *bien* も

敵方に数えられる副詞である。Togebly は 16 世紀以来 *très* と *beaucoup* が *molt* に取って代わったと記しているが、この方が幾分正確である。このデンマークの言語学者は他方で *mou(l)t[mu]* の消滅を形容詞 *mou[mu]* との *confusion* にその原因を考えているが、この仮説は認められない<sup>6)</sup>。それは *mout* と *mou* の文法範疇が異なるので、*confusion* が生じる可能性は皆無に近いこと、さらに *mou* はかなり意味が限定された、機能領域の狭い形容詞であることを理由として挙げることができるからである。

1. では古期フランス語で *mout* はどのように機能していたのであろうか。辞書や文法書から概観してみることにしたい。

まず辞書の説明であるが、Greimas の *Dictionnaire de l'ancien français, Le Moyen Age* (1992) はほとんど Godefroy の *Dictionnaire l'ancienne langue française* (10 vols, 1937-1938) の縮小版にすぎない。分類も Godefroy に従い、例文も彼からの孫引きである。従ってこの両者はまとめて説明することにした。まず形容詞としての *mout* の用例が示されているが、文意から考えて *nombreux, en grand nombre* の意味を与えているのは可算名詞を修飾する場合である：

Remist iloches *mulz* jurs. *Rois*, p. 24, Ler. de Lincy

非可算名詞に関わる場合の意味は *grand, considérable* である：

Enguarder els *multe* retribution. *Lib. Psalm*. Oxf., XVIII, 12.

実際問題として、*mout* のこの形容詞としての機能は全体からみると決して多く見られるものではない。例えば *La Chanson de Roland* では *mout* の出現数 188 に対して、この形容詞としての例は僅か 1 例しか見られない：

Escuz unt genz, de *multes* cunoisances. *Roland* 3090

序でに手元にあるテキストから例を探すと、*La Vie de Saint Alexis* と *Marie de France* の *Milun* に見いだされる：

Par *multes* terres fait querre sun amfant; *Saint Alexis*, 112

E de *muz* prices honurez. *Milun*, 20

Godefroy および Greimas が第 2 番目に採り上げているのは男性複数形の名詞として定冠詞 *li* を伴う場合で、その意味は *très grand nombre* とある：

Par les cans gisent *li mont* et *li milier*. *Anseis*, Richel. 793

この用法も、現実にはさらに稀である。因みに Godefroy も上に挙げた 1 例しか示しておらず、Greimas では例が示されていない。

*Molt* のごく一般的機能は副詞のそれである。辞書という関係もあつてか、両者ともに意味に基づいて分類しているにすぎない。まず *en grand nombre* の意味で用いられる場合、*molt de*、そして *très, grandement, nombreux* という意味で現れる場合が示される（ただし Greimas では *c'est molt=c'en est trop* が加えられているが）。そして Godefroy においては、まさに雑然と用例が並べたてられている。

1) *Bestes orent molt amassees Qu'orent de par tot amenees. Ben.*

2) *Il encort mont d'autres pechiez. Vie de Saint Alexis, 227*

3 a) *Tu douls mult. Fragm. de Valenciennes. Koschwitz*

3 b) *Li gaite fu mout vaillanz. Aucassin et Nicolette, p. 19 Suchier*

4) *E veit les contes brochier mut fierement. Olinel, 805 A. P.*

同じ辞書でも 16 世紀の語彙を扱った Huguet の分類は遥かに説得的であるまず文を修飾する *moult* (=beaucoup) を挙げ、次ぎに *moult de* を、そして *très* の意味を持つ場合を、形容詞の前と副詞の前とに分けて示し、最後に名詞としての *moult* を説明している。これは古期フランス語においても十分適用され得る分類法である。上記の 1) と 3 a) は文を修飾する場合であり、3 b) は形容詞を修飾する場合、そして 4) は副詞を修飾する例である。

辞書からは以上のような *mout* の用法を抽出することが出来るのであるが、どの用法がいつ頃から現れ、どんな競争相手と巡り会い、いつ頃その座を明け渡したかについては語ってくれない。勿論辞書にそこまで要求するのは酷であろう。

ところが文法書においても、この *molt* に関しては、あまりにも平凡な副詞でありすぎるせいか、比較的に冷淡である。Moignet にはまったく無視されている<sup>7)</sup>。Raynaud De Lage も、形容詞 *maint* と同じ意味で用いられることがあることを注記しているにすぎない<sup>8)</sup>。Mout が一人前に扱われているのは Ménard と Togeby においてである。Ménard は量と強めの副詞を扱った項目の中で、「*molt* は量の副詞として、とりわけ形容詞、副詞それに動詞の前で強めの副詞 *adverbe d'intensité* として頻繁に用いられる」ことを示し、注記として *molt par*, *molt tres* という複合表現の存在に触れ、*molt* の形容詞としての用法、*molt de+N* の他にも、*molt+N* で *beaucoup de* の意味に用いられる用法の存在を指摘している<sup>9)</sup>：

*Mult i out esbanoïment. Fresne, 374 Marie de France*

性・数に照応せず、従って形容詞としてではなく中性的な副詞として名詞と結びつくこのような例は Godefroy の中にも見ることができる：

*Non porquant on vous i fera Mout honor. Chev. as. II. esp. 6400*

Togeby によれば *molt de+N* は 12 世紀になって初めて現れ、*tant* をモデルに作られた表現であると言う<sup>10)</sup>。

以上のように、文法書もこの程度の説明でしかなく、*molt* が担っていた機能が失われることと関連のある記述はほとんど見られない。

結局われわれとしては、古期フランス語から 16 世紀にいたる過程において、*molt* がどのように用いられ、どのような競争相手と競合し、その衰退の道を辿ることになったのかを知るには、具体的に時代別にテキストを選び、これを分析し、記述することしかないという結論を得た。

分析に際してわれわれは次のような分類基準を設定することにした。Mout の機能から、1) 形容詞を修飾する場合、2) 副詞を修飾する場合、3) 動詞(ないしは文)を修飾する場合、4) *molt+N*, 5) *molt de+N*, そして 6) 副詞的名詞の *molt*, という 6 つの枠を設定した。なおこの *molt* については Bédier も述べているように<sup>11)</sup>、その用法を決めがたい場合も少なくない。従って抽出された数値は、すべて同一の結果となるとは限らないであろう。

われわれが分析の対象としたテキストは 12 世紀から 16 世紀にいたる次の 8 作品である。古期フランス語では韻文の作品が一般的であり、散文は少ない。他方 15 世紀以降では散文が普通である。このような表現形式の違い、あるいはジャンルの違い、そして作品内容の違いも当然のこと、*mout* の使用と無関係ではないであろう。そのことも十分配慮した上で作品を選んだ次第である。

まず 12 世紀からは *La Chanson de Roland* (韻文), Bérout の *Le Roman de Tristan* (韻文), Chrestien de Troyes の *Le Roman de Perceval* (韻文), 13 世紀からは *La Vie de Saint Eustache* (韻文) と Villehardouin の *La Conquête de Constantinople* (散文), 15 世紀の韻文として Coudrette の *Le Roman de Mélusine*, 散文として *Les. XV. Joies de Mariage*, 16 世紀からは Philippe de Vigneulles の *Les Cent Nouvelles Nouvelles* (散文) を選んだ。なお最初の 3 作品については *Concordance* があるので、これを利用することにした。

以下それぞれの作品の *mout* の出現を調べることにしよう。

## 2-1. *La Chanson de Roland* 『ローランの歌』

	1)	2)	3)	4)	5)	6)	Total
<b>mult</b>	<b>116(10)</b>	<b>44</b>	<b>27</b>	<b>1</b>			<b>188</b>
<b>*tres</b>		<b>6</b>					<b>6</b>

この作品では 188 例の *mout* が出現している。全体 (10 音綴 4002 行) から見た出現頻度は 4.7% となっている。そのうち形容詞を強める機能を有している例が圧倒的に多く 116 例 62% を占める (なお *molt par* の例は内数として括弧内に示してある)。そのうち *grant* との結びつきが最も多く見られ 44 例 (40%), その他は *proz*, *fier*, *bon*, *large*, *gent* などである:

tute la noit *mult grant* clartet lur donent. 2644

*Mult par* est proz Oliver, sis cumpainz, 559

副詞と結びついているものは 44 例 23%。中でも *ben* (*bien*) を強める場合が 9 例と最も多く、その他 *fierement*, *hautement* (*haut*), *dulcement* などが

続く。

*Mult* ben i fiert Carlemagnes li reis, AOI. 3543

A l'altre mot *mult* haltement s'escriet: 2597

動詞を修飾する *mout* は 27 例 14% であるが、特定の動詞と結びつく傾向は認められず、ばらついている。強いて言えば *servir*, *aimer*, *angoisser*, *se merveiller* などを修飾している：

*Mult* me merveill se ja verrum Carlung." 3179

このテキストではまだ *molt de*+N という表現は現れず、*mout*+N が 1 例見られる：

*mult* unt oud e peines e ahans. 267

ここで注目されるのは、この時期にすでに *mout* の形容詞および副詞を修飾する機能に *très* が介入していることである。このテキストでは副詞の *bien* と結びついているものが 6 例見いだされる。*Bien* との関係で言うなら、すでにこの時期から *molt* は *très* という競争相手がおり、争っていたということである：

si li truvez ki *tres* bien li aiut! 781

## 2-2. *Le Roman de Tristan de Béroul* 『トリスタン物語』

	1)	2)	3)	4)	5)	6)	Total
<b>molt</b>	<b>60(5)</b>	<b>35(1)</b>	<b>58(3)</b>	<b>4</b>			<b>157</b>
<b>*tres</b>		<b>2</b>					<b>2</b>

8 音綴 4485 行のこの作品での *molt* の出現数は 157 例 (3.5%) で、この頻度は『ローランの歌』をやや下回る。形容詞を修飾するものは 60 例 (38%) 見られるが、『ローランの歌』ほど高くはなく、そのうち *grant* と結びつくものは 16 例 (27%)、その他 *bel*, *bon* と結びついている例が比較的多い：

La roine out *molt* grant esgart 3899

*Molt* est fous qui croit tote gent. 308

副詞を修飾するものは 35 例 22%。ここでもやはり *bien* との結びつき

が多く 9 例, 次いで *tost* が 6 例。その他 *bonement*, *chier*, *souvent*, *volentiers* などを修飾している:

Et il i est *molt* *tost* venuz 639

Ogrins li dit *molt* *bonement* 1377

動詞と結びつく例は 58 (37%) と比較的高く, *amer*, *criembre*, *hair*, *se merveiller*, *se pener* など感情に関わる意味の動詞が多い:

*Molt* se penout de cel deçoivre 329

Bien sai que *molt* me het li rois 203

この作品ではいまだ *molt de*+N の例は見られず, 4 例すべてが *molt*+N で現れている:

*Molt* i out paines et ahans 1638

*Molt* i ot gent de riche ator 4101

またこのテキストでも *très* が *bien* と結びついている例が 2 件ある:

je vos di bien que *tres* bien sai 3818

### 2-3. *Le Roman de Perceval* 『ペルスヴァル物語』

	1)	2)	3)	4)	5)	6)	Total
<b>mout</b>	<b>156</b>	<b>79</b>	<b>86</b>	<b>1</b>	<b>2</b>	<b>2</b>	<b>326</b>
<b>*tres</b>	<b>3</b>	<b>3</b>					<b>6</b>

この作品は 8 音綴で 8960 行のかなり長編の物語である。従って *mout* も 326 例と多いが, 全体の頻度は 3.4% で『トリスタン物語』とほぼ同じ値となっている。ここでもやはり形容詞を強める場合が多く 156 例 (48%) を占める。*Grant* との結びつきがやはり最も多く 38 例 26% となっている。その他 *bel*, *bon*, *courtois*, *lie* などと比較的多く結びついて現れている:

Que je ai *mout* *grant* joie eue 379

Li valet estoient *mout* *bel*, 3204

副詞と結びつく場合は 79 例 24% で『ローランの歌』や『トリスタン物語』とほぼ同じ割合である。やはり *bien* を修飾する場合が多く, 27 例 34%



に達する。また *volantiers* と相性が良く (12 例), その他 *fort, tost, chier, dure-mant* などとの結びつきが高くなっている:

Le hiaume, qui *mout* bien li siet, 1178

Je le ferai *mout* *volantiers* 990

動詞と結びつく *molt* は 86 例 26%。中でも多く見られるのは *plaie* で、以下 *amer, ennuyer, desirer, esmaier, grever, se merveiller* など、感情に関わる意味の動詞との結合が多い:

Au vavasor, qui *mout* li plot; 5525

Sire, fet il, *mout* me mervoil 8412

この『ペルスヴァル物語』では *molt+N* と並んで *molt de+N* の例も現れている。またこれと連動して副詞的名詞としての *molt* も見られる:

Encois i a *mout* joie et bruit. 2577

De pucele a *mout* qui la beise; 544

Amis, se le cuer i avez,

Fet li prodom, *mout* an savroiz, 1499

なおこのテキストでは、形容詞および副詞を修飾する *très* がそれぞれ 3 例見られる:

Dont il li fist si *tres* grant duel, 2695

*très* をさらに *molt* が修飾している例もある:

Veissiez *mout* *tres* *volantiers*, 4525

#### 2-4. *La Vie de Saint Eustache* 『聖ウスタッシュ伝』

	1)	2)	3)	4)	5)	6)	Total
mont	28(1)	40(2)	27(1)				95

この作品は、今回の調査対象作品の中では最も短い 8 綴 2052 行の小品である。従って例の数値も 95 と少ないが、出現頻度は 4.6% で、ほぼ『ローランの歌』の値と等しい。形容詞に結びつく場合は 28 例で 30%, そのうち *grant* (*greignor*) と関わるものは 7 例 (28%), その他 *bel, cruel* などと結び

ついている：

Avras *mont* greignor guerredon, 1166

一方副詞との結び付きは 40 例 42% と最も高いが<sup>5</sup>, *humblement*, *volentiers*, *bien*, *tendrement* の順で, *bien* との関係はそれほど高くはない：

Cil li respont *mont* humblement 807

動詞に関わる場合は 27 例 28%, *plaire*, *se peiner*, *peser* など多様である：

Qui *mont* l'enseignout de bien fere, 97

なおこの聖ウスターシュを扱った散文作品が同じ 13 世紀に作られている。8 音綴の韻文に直して計算すると、韻文作品のほぼ半分の 1100 行程度であるが、ここでは *mout* の出現は目立って少ない。形容詞にかかる例が 5, 副詞にかかる例が 3, 動詞を修飾するもの 6 例, 合計 14 例のみである。

## 2-5. *La Conquête de Constantinople* 『コンスタティノーブル征服』

	1)	2)	3)	4)	5)	6)	Total
<b>mult</b>	<b>275 (1)</b>	<b>107</b>	<b>75</b>	<b>3</b>	<b>20</b>	<b>7</b>	<b>489</b>
<b>*tres</b>	<b>1</b>						<b>1</b>

この作品は散文で書かれたかなり長大な作品である。仮にこれを 8 音綴の韻文に換算してみると、ほぼ 7500 行になる。従って全体で 489 という数値はかなり高い価 (6.5%) であると言える。

まず形容詞に結びつく場合は 275 例あり, その比率は 56% となり, 『ローランの歌』に次ぐ高さである。そして他の作品よりも, ある特定の形容詞と集中的に関係する傾向が強いようである。その内 *grant* 101 (39%), *bon* 32 (13%), *fort* 19, *riche* 17, *bel* 15, *lie* 14, *sage*, *destroit*, *dolent*, *halt*, *proz*, *vaillant* などと結びつく例が多く, 人物や行為の描写が中心となる伝記文学, 歴史物というこの作品の内容が反映していると言える。

Dedenz cel jor avint un *mult* granz damages en l'ost: 388

副詞に結びつく場合は 107 例 (22%) あるが, *bien* が圧倒的に多く 34 例

(32%), 次いで *volentiers* 24, *durement* 13, *poi* (*pou*), *sovent* などが続く。

Et li cuens Loey, . . . , fu navrez en. II. los *mult* *durement*. 359

動詞と結びつく例は 75 (15%) とかなり少ないのも特徴的である。その中でも *honorer*, *plorer*, *se merveiller*, *blasmer* などとの結び付きが好まれている。

Et quant il vit les messaiges, si les honora *mult*. . . 284

Et li Hermin de la terre, . . . se comencierent a torner devers lui, qui haoient *mult* les Grex. 310

この作品では *molt*+N も見られるが, *molt de*+N の方が多く出現している。また独立した副詞的名詞も若干見られる。

. . . que *mult* i avoit bon chevalier de cors, . . . 245

*Mult* i ot *de* cels del conseil de l'empereor. . . 294

. . . , dont il en i avoit *mult*. 203

なおこのテキストでは *très* の使用例は 1 回のみである。

la refu li tresors si *tres* granz trovez que. . . 250

## 2-6. *Le Roman de Mélusine* 『メリュジーン物語』

	1)	2)	3)	4)	5)	6)	Total
<b>moult</b>	<b>184</b>	<b>77</b>	<b>89</b>		<b>34</b>	<b>19</b>	<b>403</b>
<b>*tres</b>	<b>26</b>	<b>3</b>					<b>29</b>

15 世紀に書かれた Coudrette の『メリュジーン物語』は, 8 音綴の韻文の物語で, 最後の頌歌も含めて 7125 行の作品である。403 (5.6%) という出現率は, 上記の他のロマンの値を上回っている。ロマンとは言うものの, この作品は内容的には妖精メリュジーンにまつわる建国物語であり, それだけに武勲詩的な描写の場面の多い作品である。

形容詞と関わるものは 184 (46%) と比較的多く, 形容詞としては *grant* 45 (25%) に続いて *beau* が 30 例あり, その他 *noble*, *bon*, *fort*, *haut*, *merveilleux*, *sage* などと結びついている:

Car il fiert coups *moult* merveilleux; 2462

副詞に結びつく場合は 77 例 19% で、他の作品同様 *bien* が断然多く 20 例、その他として *doulcement*, *fort* (*forment*), *grandement*, *noblement*, *souvent*, *volentiers* などが見られる:

Et *moult* noblement les festoye. 1836

動詞と結びついている例は 89 (22%) である。*aimer*, *esbahir*, *se merveiller* (*esmerveiller*) などと関わっている:

*Moult* aimoit le deduit des chiens, 164

もはや *moult*+N は見られず、*moult de*+N がかなり多く出現している (34) のもこの作品の特徴となっている。また副詞的名詞として用いられている例も少なくない (19)。

Amainent *moult de* Poitevins 2423

*Moult* en tüent, *moult* en occient. 2349

さらにこの作品では *très* がかなり多く形容詞と結びついている (26 例)。そのうち *grant* と結びつくものは 11 例見られ、他は *chier*, *doux*, *merveilleux*, *noble* などで、この *très* という副詞がかなり *moult* の領域に介入してきていることが分かる。

Et si *tres* grant coup lui donna 3370

また副詞と結びついた 3 例中 2 例は *bien* を修飾している:

Vous estes sages et enseignez

Et avez *tres* bien labouré. 949

## 2-7. Les. XV. Joies de Mariage 『結婚十五の愉しみ』

	1)	2)	3)	4)	5)	6)	Total
<b>moult</b>	<b>10</b>	<b>6</b>	<b>9</b>		<b>8</b>		<b>33</b>
<b>*tres</b>	<b>14</b>	<b>12</b>					<b>26</b>

散文で書かれたこの作品での *moult* の出現数はきわめて少ない (33 例)。しかし作品が短い訳ではない。8 音綴で計算すると 3500 行程度の長さにな

る。形容詞の前では 10 例 (30%), 副詞と結びつくのも 6 例 (18%), 動詞に関わるものは 9 例 (27%)。また *moult de*+N は 8 例見られ全体の 24% を占める:

dont el est *moult* courrocee. V-369

et les despent en *moult de* manieres VII-108

他方 *très* の出現も *moult* に引けを取らない。形容詞を修飾するものが 14 例見られるが、そのうち 7 例が *bon* と結びついている。副詞を修飾する 12 例のうち *bien* と結びつくものは 10 例:

qu'il trouve une femme qui est une *tres* bonne galloise VII-5

Ainxin le fait et joue *tres* bien XI-244

なおこのテキストには *moult* や *très* とは別に、意味的に中性である *bien* が多く見られるが、これも *moult* の競争相手の一つである。この *bien* についてはいずれ後の機会に報告することにして、本論では触れない。

## 2-8. *Cent Nouvelles Nouvelles* de Philippe de Vigneulles 『新百話』

	1)	2)	3)	4)	5)	6)	Total
<b>moult</b>	<b>8</b>	<b>12</b>	<b>3</b>		<b>10</b>	<b>4</b>	<b>37</b>
<b>*tres</b>	<b>29</b>	<b>54</b>					<b>83</b>
<b>*beaucoup</b>		<b>2</b>	<b>19</b>		<b>32</b>	<b>3</b>	<b>56</b>

16 世紀のこの作品はかなり大部なもので、8 音綴の韻文に計算し直すと約 19,000 行ほどになる。しかし *moult* の用例はきわめて少ない。全体で 37 例しか見いだされず、そのうち形容詞と結びつく場合は 6 例、副詞とは 12 例、動詞とは 5 例のみである。また *moult de*+N は 10 例、*moult* の副詞的名詞としては 4 例となっている:

Nous avons soupeez ensembles et avons estez *moult* bons compains, comme vous sçavés. . . I-40

Et *moult* d'autres choses mettoit avant ledit Colair. . . LVIII-66

他方 *très* の出現は *mout* を抜き 83 例見られる。そのうち形容詞と結び

つくものは 29 例を数えるが、特定の形容詞に集中することはない。また直接動詞に関わる例は見られない。

Le curé, . . . , en fut *tres* content. . . XIV-32

副詞に結びつく 54 例の中では *bien* が最も多く 27 件、次いで *fort* が 19 と、特定の副詞と結びついて現れているのが特徴である。

le seigneur. . . et se courrouça *tres* fort rencontre vous. . . XIX-83

またこのテキストではじめて *beaucoup* に出逢う。形容詞を修飾するものは見られないが、副詞を修飾するもの 2 例、他は動詞に関わる場合 22 例である。

Lequel la print bien volentiers et en remercia *beaucop* le pouvre homme. . .

VIII-25

さらに *moult de*+N と並んで *beaucoup de*+N が 32 例出現している。

Et avoit cedit prebtre *beaucop de* bestial, . . . IV-23

3. 以上必ずしも詳細に時代を限定し、多量のテキストを調査した訳ではないが、分析結果からある程度 *mout* の機能上の推移を予測することが出来る。

13 世紀までの古期フランス語の作品では、韻文・散文を問わず、また作品内容を問わず、形容詞、副詞、動詞を修飾する副詞として *mout* はかなり頻繁に出現していた。同時に少ないとは言え *très* も出現していた。しかし 15 世紀の散文『結婚十五の愉しみ』に至ると *mout* は、とりわけ形容詞、副詞を修飾する機能において衰退の兆しを見せ、*très* が優位に立つ。16 世紀の『新百話』になると、この傾向はさらに際立ち、*beaucoup* の介入が見られ、形容詞・副詞の修飾には *très* が、動詞（文）の修飾および数量副詞としては *beaucoup* という機能分化が起こり始めたことが分かる。

ところで 15 世紀の散文作品としての『結婚十五の愉しみ』と、同じ 15 世紀の韻文作品『メリュジーヌ物語』との間に *mout* の出現に関して大きな落差が見られる。つまり『メリュジーヌ物語』では、ほとんど古期フランス語の

作品に見られるのと同じ傾向が現れている点である。厳密な制作年代、写本の年代は専門家に委ねるとして<sup>12)</sup>、この2つの作品には時間的な隔たりは無視することが出来るであろう。となると（作者の言語上の慣習を捨象すれば）作品の形式およびその内容が問題となろう。『メリュジヌ物語』が韻文の作品であり、内容的に武勲詩的な色合いの濃い建国物語ということから、古期フランス語の伝統を引きずっているということに *mout* の多用の理由を求めることが出来よう。しかし、特に形容詞と結びつく *très* の例がかなり増えている点に新しい時代への動きを認める必要もあるが。一方『結婚十五の愉しみ』は、戦争や騎士道とはおよそ縁のない町人階級の日常的な家庭での出来事を取り上げた世間話である。もはや韻文とは馴染まない世界である。武勲詩的な、あるいは宮廷文学的な表現手段に代わるものが求められていたとしても不思議ではない。

*Mout* は1音綴の小辞であるので、韻文の作詩上、音綴の不足を補うのにきわめて有効な道具である。その意味では *très* も同様である。しかし *mout* はこれまでも見てきたように機能範囲が広い。形容詞、副詞さらには動詞と結び付き得る。その上、特定の位置が定まっている訳ではなく、比較的自由を享受していた。このことが特に韻文の作詩上きわめて重宝であった大きな理由の一つである。これに比して *très* は、同じ1音綴ではあっても形容詞および副詞としか結びつかず、その上被修飾語の直前という定まった位置が要請される。この意味からも *mout* はまさに韻文の道具であったということも出来よう。2格体系の格の消失に伴う語順の固定化への動きは、むしろ *très* に与したということも出来よう。

*Mout* は語源的に「量的な強め」の意義を有する副詞である。他方 *très* はラテン語の *trans* に由来しているので、「超過」を本義とする「質的な強め」の副詞であるということが出来よう。古期フランス語のテキストで *mout* がかなり頻繁に *grant* と結びついて現れているのも、この形容詞のもつ「量的な」意義との照応が働いていると判断出来よう。また『ローランの歌』以来認められる *très* の多くが *bien* と結びついているのは、*bien* が本来「質的

な」意義を有しているからであると言うことが出来よう。この意味で *mout* から *très* への移行は、単なる文法道具の交替という現象にとどまらず、古期フランス語から中期フランス語・ルネッサンス期フランス語への移行の過程で、人々のものの見方・判断に「量」から「質」への転換が起こったと言うことも出来るのではないだろうか。

*Mout* が *beaucoup* と交替するのは 16 世紀であるが、その交替は動詞ないしは文を強める機能と、*mout de*+N および副詞的名詞としての機能であり、これは明らかに量的意義に関与する。動詞（文）を強める際に量的強調を避ける場合には、*bien* や *tout* といった別の副詞が用いられることになる。数量表示としての *mout de*+N は、Togebly の指摘もあるように、古期フランス語の当初から存在したものではない。まず *mout*+N との共存状態があり、やがて *mout de*+N という表現が生じる。つまり *mout*→*mout*+N →*mout de*+N と *mout* が分析的発展を遂げた段階で *beaucoup* と入れ替わったことが分かる。この交替は単なる語彙のそれであるとも見る事が出来るが、2 音節になったことで文中の要素として音的に安定したことは疑えない。従ってこれも韻文世界からの脱皮には不可欠であったと言える。

#### 注

- 1) Cf. Godefroy: *Dictionnaire de l'ancienne langue française*, Tome V. Klauss, p. 378 et Darmesteter, A.: *La vie des mots*, Editions Champ Libre, 1979, p. 163
- 2) Greimas et al.: *Dictionnaire étymologique et historique du français*, Larousse, 1992
- 3) Cf. Huguet: *Dictionnaire de la langue française du seizième siècle*, Champion-Didier 1925-1967
- 4) Palsgrave: *Lesclarcissement de la langue françoise*, Slatkine Reprints 1972
- 5) Gougenheim, G.: *Grammaire de la langue française du 16<sup>e</sup> siècle*, Picard, 1974, p. 56
- 6) Togebly, Kr.: *Précis de Grammaire historique de la langue française*, p. 87
- 7) Moignet, G.: *Grammaire de l'ancien français*, Klincksieck, 1973
- 8) Hasenohr & Raynaud De Lage, G.: *Introduction à l'ancien français* S. E. D. E. S. 1990, p. 100



- 9) Ménard, Ph.: *Manuel du français du moyen âge, I. Syntaxe de l'ancien français*, SOBODI 1973 pp. 263-264
- 10) Togeby: *ibidem*
- 11) Bédier, J.: *La Chanson de Roland (Commentaires)*, Piazza 1968 p. 428 なおこの glossaire は Foulet, L. が作成したものであるので、この見解も実際にはフーレのものであろう。なおこの glossaire には随所に脱落があり、この molt に関しても v. 1628 が抜けている。
- 12) Cf. Introduction des textes (Jean Rychner et Eleanor Roach)

### Textes

- Bédier, J.: *La Chanson de Roland*, Piazza 1932
- Moignet, G.: *La Chanson de Roland*, Bordas, 1989
- Duggan, J. J.: *A Concordance of the Chanson de Roland*, Ohio State University Press, 1969
- Ewert, A.: *The Romance of Tristan by Béroul*, Oxford 1970
- Andrieu, Piolle, & Plouzeau: *Le Roman de Tristan de Béroul, Concordancier complet des formes graphiques occurrentes*, Université de Provence, 1974
- Lecoy, F.: *Le Conte du Graal (Perceval)*, tomes 1 et 2, Champion, C. F. M. A. N° 100 et 103, 1973, 1975
- Andrieu & Piolle: *Perceval ou Le Conte du Graal de Chrétien de Troyes, Concordancier complet des formes graphiques occurrentes*, Université de Provence, 1976
- Peterson, Holger: *La Vie de Saint Eustache, poème français du XIII<sup>e</sup> siècle*, Champion, C. F. M. A. N° 58, 1928
- Murray, J.: *La Vie de Saint Eustache en prose*, Champion C. F. M. A. N° 60, 1929
- Faral, Ed.: *La Conquête de Constantinople de Villehardouin, tomes 1 et 2*, Les Belles-Lettres, 1961
- Roach, E.: *Le Roman de Mélusine ou Histoire de Lusignan par Coudrette*, Klincksieck, 1982
- Rychner, J.: Les. XV. *Joies de Mariage*, Droz, T. L. F. N° 100, 1963
- Livingston, Ch. H.: *Les Cent Nouvelles Nouvelles de Philippe de Vigneulles*, Droz, 1972